

大連における養殖業

BY DALIAN OFFICE

周囲を海に囲まれた大連では、第一次産業の半分を水産業が占めています。その中でも特に養殖が盛んで、大連近海では至る所に養殖のブイを見ることができますし、市内の海鮮料理屋では安く新鮮な魚介類を味わうことができます。

そこで、今回は大連の養殖業をレポートしてみたいと思います。



1. 大連の養殖業の概要

大連は遼東半島の先端に位置し、三方を海に囲まれ、海岸線の総延長が1,906kmにも及びます。年間の海水温は1~25度で、海水に含まれる栄養が豊富なため、魚、甲殻類、貝類、藻類など多くの海産物が生息しています。

この海を活用した大連の養殖は、海水養殖面積が24.3万ヘクタール（前年対比13%増）に及び、海底へ稚魚・稚貝を放流して育てる「増殖」も含めるとその生産額は87.4億元（約1,355億円）になります。

種類としては、様々な魚介類が養殖されていますが、特にホタテ、牡蠣、アサリ、ワカメ、昆布等が盛んで、それぞれ年間10万トン以上の生産量があります。大連の海は中国でも北方に位置していることから（日本の東北地方と同緯度）、ワカメや昆布の中国における主要産地であり、また、その冷たい海でじっくり育てられるナマコは、中国で最も品質が良いと言われています。フグの養殖も盛んで、日本向けの供給基地となっています。

2. 大連での養殖方法

大連での養殖方法には、種類に応じて、浅い海でのいかだ養殖、箱や網を海中に沈める網箱養殖、陸上施設での養殖、海底に種苗を放流して後に収穫する増殖などがあります。大連の海岸から良く見える海上で数珠状に繋がっているブイは、ワカメや昆布、ホタテ、ナマコなどの養殖に使われています（海中にロープを張り、貝類等を入れた箱・籠の取り付けや海藻の固定を行う）。

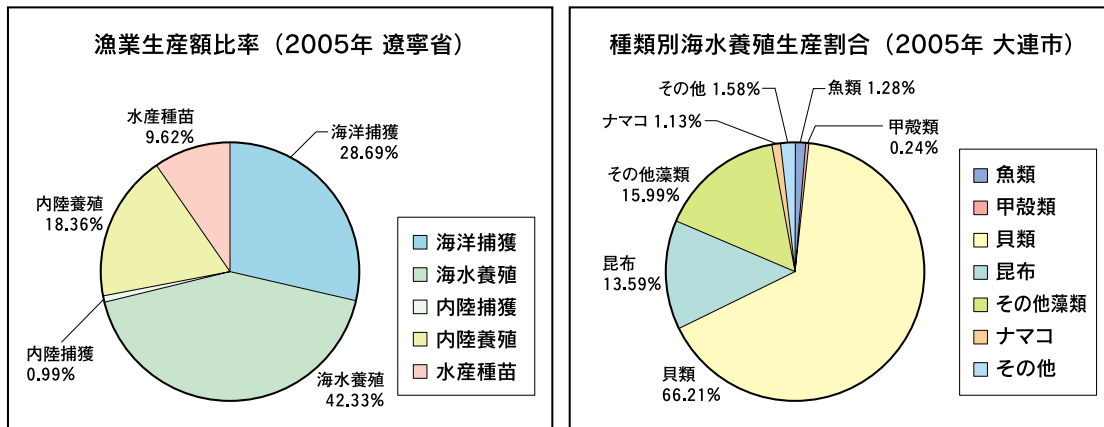
養殖されたものの多くは日本のほか、韓国、アメリカ等に輸出されています。最近では、中国国内需要の高まりにつれ、国内販売向けの量も大きく伸びています。



養殖ブイの広がる大連の海

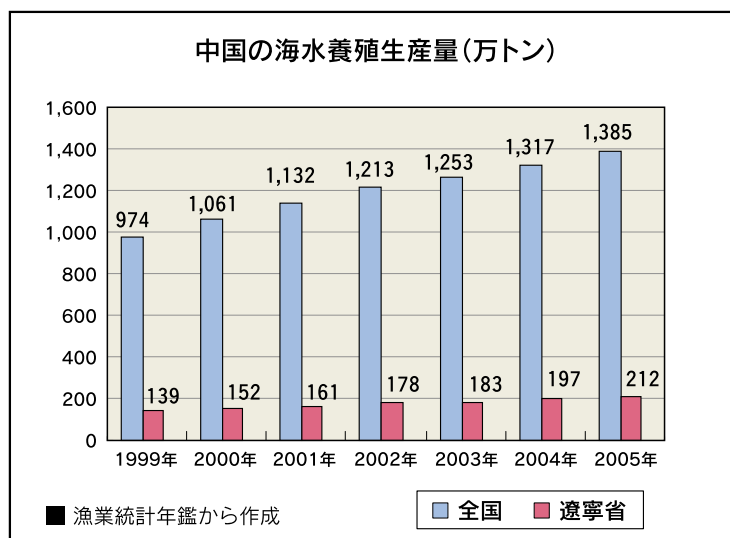
3. 中国の養殖業

大連に限らず、中国の養殖業は毎年大きく伸びており、2005年の全国水産養殖総産量（内陸での養殖も含む）は3,494万トン（前年対比4.09%増）で、そのうち、海上養殖の総



産量は1,385万トン (同5.17%増) です。(参考：日本全国121.1万トン、福岡4.7万トン) 中国全体では4対6の割合で内陸での養殖が多いのに対し、大連では海水面を利用した養殖が多いのが特徴です。

今後も養殖業は大きく増加する見込みであり、中国農業部では、2010年までに国内向け魚介類供給量のうち約70%を養殖物にすることを計画しています。具体的には、現在、資源保護のために中国領海全域及び長江（揚子江）で行われている季節的禁漁措置の継続と漁船削減等を行い、その削減分及び国内需要の増加分を養殖で補う予定です。



4. 大連の陸上養殖場

日本で養殖と言えば海ですが、ここ大連では陸上施設での養殖にも力をいれています。

ある施設では、フグやホタテ、ヒラメ、ナマコなどを生産しており、日本や韓国へ輸出する一方で国内市場の開拓にも力を入れています。使用する海水は近くの家からポンプで汲みあげ、しっかりと浄化し病気等の発生防止に気を使っています。

フグは水温8度以下になると死んでしまうので、夏は海で育てますが、冬は室内の養殖池で育てています。稚魚についても自社で賄っており、親魚を飼育し卵を産ませています。

ホタテについては、1~2月に室内の養殖池で卵を産ませ、3~4月に海に放流し、2年ほど育てて出荷します。

ナマコは低水温でも大丈夫なため、小さい(約3cm以下)間は室内の養殖池で育てま

すが、その後は年間を通して海で育てます。

5. 課題

順調に発展している大連の養殖業ですが、大きく分けて3つの課題があります。

- 1) 養殖に必要な海面の確保
大連では現在、港湾整備や景観上の理由から、養殖可能な海面の制限が強化されています。
- 2) 養殖に必要な種苗（稚魚や卵）の確保
稚魚の乱獲や孵化直後の稚魚を大型魚の飼料に使うことなどから、今後確保が難しくなるとの懸念があります。
- 3) 病気の対応
大連は台風などの自然災害は少ないのですが、需要の拡大にあわせて魚の養殖密度を高くすると病気が発生しやすくなります。

6. 大連の今後の方針

前述の課題を克服し、養殖業の発展をさらに推し進めていくために、大連市では生産性の向上と高付加価値の水産物の生産拡大を推進していく方針です。

具体的には、外国との交流や外資企業からの技術導入を通して面積当たりの生産性向上を図るほか、高価格で販売できる水産物への転換（カラス貝からホタテへの種類変更等）を進めています。その他、今後、需要が見込まれる養殖用の種苗の生産にも力を入れることとしており、陸上施設での生産も奨励しています。

7. 最後に

狂牛病、鳥インフルエンザなどの影響による水産資源に対する世界的な需要の拡大、並びに中国国内での消費増加により、将来的には日本向けの輸出が困難になる状況も考えられると話す水産関係者がいました。

日本としては、困った事態ですが、養殖の技術や品種に関しては、日本の方が進んでいる面があります。また、ナマコのように中国では珍重されるけれども、日本ではそれほどでもないものについては、日本からの輸出が増加しています。今後もお互いの強みを活かして、水産資源の持続的な確保と経済発展ができることを期待します。



ホタテ産卵のための室内養殖池



フグの室内養殖池